

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32661

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593408

研究課題名(和文) 1型糖尿病をもつ子どもを養育する家族への看護援助指針の開発

研究課題名(英文) Development of nursing guidelines for parents raising a child with type 1 diabetes.

研究代表者

出野 慶子 (IDENO, Keiko)

東邦大学・看護学部・教授

研究者番号：70248863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：1型糖尿病をもつ子どもの父親の、療養行動へのかかわり、母親へのサポート、父親役割を明らかにする目的で、糖尿病キャンプにて7名の父親にグループインタビューを実施した。次に、そのような父親の行動を母親がどのようにとらえているかを明らかにするために4組の両親へグループインタビューを行った。療養行動や家事の手伝いだけでなく、父親の気遣いが母親へのサポートになっていた。また、きょうだいのフォローや母親とは異なる子どもへの対応によって母親との役割バランスをとっていた。何が母親へのサポートになるかを父親にフィードバックすること、および父親と母親の役割分担について考えられるように支援する重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to clarify fathers' roles when caring for children with type 1 diabetes and the support provided by them to the mothers. We conducted a group interview with 7 fathers at a diabetic camp. Subsequently, to clarify the mothers' view of the fathers' behavior, we conducted a similar interview with 4 couple parents. The following results were obtained. In addition to fathers caring for the child and helping in housework, their emotional support was important to the mothers. Fathers' behavior toward the siblings and their parenting styles were different from those of mothers in that fathers were well balanced. Nursing intervention was required to help fathers understand mothers' views about their behavior, and for them to understand one another's roles.

研究分野：小児看護学

キーワード：1型糖尿病 養育 家族

1. 研究開始当初の背景

1 型糖尿病をもつ子どもが年少である場合、インスリン注射、血糖測定、低血糖の対処などの療養行動を子ども自身が実施するのは難しいため、これらは家族に委ねられている。とりわけ母親は日常の育児に加えて、これらの療養行動の責任を担うことになり、疾患管理の責任感と、子どもをかわいそうに思う気持ちの中で葛藤しながら生活を送っている。また、母親は継続的に子どもを気遣っており、低血糖症状についても不安を抱いている。さらに、幼児期特有の食行動の問題である偏食、少食、食べむらや、運動量が一定しないことは血糖値の変動に影響するため、この時期の子どもの疾患管理を困難にしている。

研究代表者は、このような不安や困難感、葛藤を抱きながら子どもを養育している母親に対する看護援助の検討を行い、【母親の情緒的安定をはかる援助】を基盤とし、【子どもの欲求と療養行動の折り合いをつけたかかわりを促進する援助】と【療養行動の自立に向けたかかわりを促進する援助】を実施する看護援助の枠組みを導き、その有効性を検証した。

1 型糖尿病のような慢性疾患をもつ子どもの養育においては周囲のサポートが必要であり、特に母親にとって最も身近な父親のサポートは、子どもが年少であるほどその必要性は高い。父親が就労によって家庭での子どもの療養行動にあまりかかわれなくても、情緒的なサポートとして父親は重要な資源であることは報告されている。しかし、父親がどのように療養行動にかかわっているのかや、母親への具体的なサポート内容は明らかになっていない。そこで、これらや父親の役割について検討することは、1 型糖尿病をもつ子どもを養育する家族への支援のあり方の示唆につながると考えた。

また、幼児期に 1 型糖尿病を発症した青年の、糖尿病をもちながら成長する体験を調査した研究では、年少児のときに生じた困難を親が子どもに代わって受けとめ、療養行動を支えてくれたと感じていた青年は、糖尿病をもちながら成長する体験が肯定的であることが報告されている。親の適切なサポートは、病気をもちながら成長・発達していく子どもにとって大切であり、父親と母親がうまく協働しながら子どもを養育できるように、家族全体を視野に入れた看護援助指針の開発は重要と考え、本研究に着手した。

2. 研究の目的

1 型糖尿病をもつ子どもを養育している家族に対する看護援助指針の開発を目指し、研究 1、研究 2 を実施した。

- (1) 1 型糖尿病をもつ子どもの父親が、どのように療養行動にかかわっているか、母親へのサポート状況、父親の役割意識を明らかにする (研究 1)。
- (2) 1 型糖尿病をもつ子どもの父親と母親の

それぞれが、療養生活においてどのような思いをもっているかを明らかにする (研究 2)。

3. 研究の方法

研究 1 では、幼児から小学 2 年生までの 1 型糖尿病をもつ子どもの父親を対象とし、家族会主催の小児糖尿病キャンプにて、約 70 分のフォーカスグループインタビューを実施した。インタビュー内容は、療養行動における父親のかかわり、父親の母親への働きかけ、父親の役割意識であった。インタビュー内容から逐語録を作成し、語りの内容を意味内容が損なわれないように要約してコード化し、コードの類似性、相違性から比較分類し、類似するものをまとめて抽象化し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

研究 2 では、幼児から小学 2 年生までの 1 型糖尿病をもつ子どもを育てている両親 (夫婦ペア) を対象とし、同様に小児糖尿病キャンプにてフォーカスグループインタビューを実施した。インタビュー内容は、父親 (夫) の母親 (妻) への思いとサポート状況、それらに対する母親の思いであった。分析は同様の手順で行った。

なお、研究 1, 2 ととも所属機関の倫理審査委員会の承認を得たうえで、家族会責任者の了解も得て実施した。

4. 研究成果

研究 1 においては、2~8 歳 (男児 1 名、女児 7 名) の 1 型糖尿病をもつ子どもの父親 7 名が参加した。子どもの罹病期間は、約 9 か月~6 年であり、ペン型注入器使用者が 6 名、インスリンポンプ使用者が 1 名であった。

父親は、日々の子どもの状況をよくわかっている母親のインスリン量の判断を尊重しつつ、自分ができる範囲で子どもの血糖測定や注射を実施しており、それらは母親に対する実質的なサポートになっていた。その一方で、父親が注射や血糖測定にかかわりたいと思っても、母親が実施することを子どもが強く望んだり、仕事の都合などで実施できない状況もあった。このように、父親がどのような形で療養行動にかかわれるかは、それぞれの家庭の状況や子どもの反応によって異なってくるため、父親が実施可能な療養行動へのかかわり方について考えられるように支援することが大切である。しかしながら、父親が血糖測定や注射を実施する自信がない場合は、実施可能な範囲が狭められることになるので、子どもが年少であるほど、子どもの入院時から父親も巻き込んだ血糖測定やインスリン注射等の初期教育は、より重要になると考えられる。

父親は食事や間食に関して、子どもの“食べたい気持ち”に応じられるようにインスリン量を調整し、子どもの食べたい欲求の強さや食べさせる頻度を考えてかかわっていた。

子どもにとって食事や間食は大きな楽しみの1つでもあり、それゆえ、子どもの食べたい欲求を過度に制限することは、子どもにとってストレスになるとともに、父親にとってもストレスになることが考えられる。父親が子どもの“食べたい気持ち”のみを重視するのではなく、子どもの反応や状況を考慮した対応は、食事療法における母親の大変さや血糖コントロールの重要性を理解しているかわかりだと思える。

父親全員が、子どもの療養行動に関心をもっており、母親の負担が大きいことを理解していた。そのため、自分ができる範囲で療養行動にかかわることの他に、自分の得意な家事を行ったり、子どもを外に連れ出すなど、母親が自由に使える時間を意図的に作っていた。また、母親の好きなお菓子をお土産にしたり、自分の小遣いで食事をごちそうしたりと、母親をねぎらう行動をとっていた。しかし、これらの行動が母親へのサポートになっているかの確信を父親はもてていないことが明らかとなった。療養行動への直接的なかわりだけでなく、母親の気持ちが楽になるように気遣ったり、母親が自由に使える時間を確保することは、母親に対するサポートとなっていることを父親が意識できることは必要である。そのためには、父親が母親の大変さを理解し、父親なりに母親をサポートしたいと考えて実施している行動について、母親がどのように受けとめているかを父親にフィードバックできる機会を設けることが大切であると考えられた。

父親の役割として、【子どもから頼られる存在】【母親との役割バランス】【社会・経済環境の調整】を父親が意識していることが明らかとなり、これらは社会一般的な父親役割と、病気をもつ子どもを養育する父親役割を併せもつものであった。

母親は疾患管理の責任を負っており、父親が「母親は常に食事のことばかり考えている」「母親は血糖値のことが頭の中で離れない状態」ととらえているように、日々の血糖値やHbA1c値にとらわれやすく、母親の視野が狭くなっている可能性が大きい。それゆえ、母親とは異なる視点で子どもにかかわったり、客観的に見ることによって母親と役割分担することは、父親の役割の1つであると考えられる。母親が厳格に血糖コントロールをしようとした場合はそれを抑制する方向に、逆に子どもの欲求に巻き込まれ過ぎている場合は、それを抑制する方向に父親がかかわれることは、母親が療養行動について柔軟に考える機会となる。

母親との役割バランスの1つとして、きょうだいのフォローを父親が行うことがあげられた。1型糖尿病をもつ子どものきょうだいは、食事や間食に不満をもっていたり、同じ小学校に在籍している場合は、友人とのやりとりで困惑している状況があり、母親が病気をもつ子どもの方に気を取られている場

合は、父親がきょうだいにも目を向けてかわることが大切である。病気をもつ子どもだけでなく、きょうだいや母親を含めた家族全体を客観的に見ることができるのは父親であり、母親が1型糖尿病をもつ子どもの主なケア者であるならば、父親は家族全体を調整するサポート者であるといえる。

父親は仕事の調整よりも“仕事を頑張ってお金を稼ぐ”ことが父親の役割であり、子どもが好きなことを継続できるためにも大切であると考えていた。また、1型糖尿病をもつ子どもの場合、家庭生活から学校生活、地域へと子どもの生活範囲は広がっていくため、子どもの生活状況や生活範囲に合わせた調整が必要となってくる。いかに他の子どもたちと同じような生活ができるように調整するかに主眼が置かれるため、父親の役割として、現在の子どもの生活のみならず、将来を見据えての子どもの生活を調整する広い視野がもてるように支援することも重要である。これらより、きょうだいや母親を含めた家族全体の生活を視野に入れながら、母親との役割バランスを父親がうまくとれるように支援することの重要性が示唆された。

これらの研究成果は、第23回日本小児看護学会学術集会ならびに第18回日本糖尿病教育・看護学会学術集会において発表した。また、日本糖尿病教育・看護学会誌18(1)に投稿した。

研究2においては、1型糖尿病をもつ子ども育てている4組の両親がグループインタビューに参加した。子どもの年齢は6~8歳(男児1名、女児3名)であり、罹病期間は約8か月~4年で、ペン型インスリン注入器使用者が2名、インスリンポンプ使用者が2名であった。

父親は、自分ができる家事などを実施しており、母親をサポートしたいと思ってさらに模索していた。また、子どもに対して発症前と変わらぬ対応をしたり、疾患がらみのことは子どもに言わないように心がけたりしていた。父親がほとんどサポートできていないと感じていても、母親は子どもにとって父親が逃げ道となっていると感謝していた。父親が、母親の実施する療養行動を肯定したり、話を傾聴したり、自由になれる時間を作っている場合は、母親の情緒の安定につながっていた。これらのことから、療養行動や家事の手伝いだけでなく、父親が母親の大変さを受けとめ、気遣うことがサポートになっていることが明らかとなった。また、母親とは異なる子どもに対する父親のかかわり方は、母親との役割分担の一つになっていた。

研究1,2の結果より、父親が実施しているサポートを、母親がどのように受けとめているかをフィードバックすること、ならびに父親と母親のそれぞれの役割について考える機会をもてるように支援することの重要性が示唆された。

本研究の参加者は、家族で参加できる小児糖尿病キャンプの参加者であり、もともと子どもの養育に熱心な両親である可能性が高いことは、研究の限界である。

これらの研究成果は、第 61 回日本小児保健協会学術集会ならびに、第 19 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会において発表した。

今回は、家族全体を視野に入れた看護支援の示唆は得られたが、看護援助指針の開発までには至らなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

出野慶子, 河上智香, 天野里奈, 中村伸枝: 1 型糖尿病をもつ年少の子どもを養育する父親の役割. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 査読有, 18(1), 33-39, 2014.

〔学会発表〕(計 4 件)

出野慶子, 河上智香, 天野里奈, 中村伸枝: 協働して 1 型糖尿病をもつ子どもを育てている夫婦の思い. 第 19 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 2014.9.21, 長良川国際会議場(岐阜県岐阜市)

出野慶子, 河上智香, 天野里奈, 中村伸枝: 幼稚園・小学校に通う 1 型糖尿病をもつ子どもの母親の体験. 第 61 回日本小児保健協会学術集会, 2014.6.21, 福島グリーンパレス(福島県福島市)

出野慶子, 河上智香, 天野里奈, 中村伸枝: 1 型糖尿病をもつ年少児を育てる父親の役割. 第 18 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 2013.9.22, パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

出野慶子, 河上智香, 天野里奈, 中村伸枝: 1 型糖尿病をもつ子どもの父親の療養行動におけるかかわり. 第 23 回日本小児看護学会学術集会, 2013.7.13, 高知市市民文化プラザ(高知県高知市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

出野 慶子 (IDENO, Keiko)
東邦大学・看護学部・教授
研究者番号: 70248863

(2) 研究分担者

河上 智香 (KAWAKAMI, Chika)
東邦大学・看護学部・准教授
研究者番号: 30324784

天野 里奈 (AMANO, Rina)
東邦大学・看護学部・助教
研究者番号: 90459818

(3) 連携研究者

中村 伸枝 (NAKAMURA, Nobue)
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号: 20282460